

<研究ノート>

文化資源としての「やちむん」の歴史の変遷 —沖縄県那覇市壺屋と読谷村座喜味の事例から—

今 林 直 樹

はじめに

本稿は、沖縄の文化資源としての「やちむん」の歴史の変遷について、「資源化」という視点から考察することを主たる目的とする。取り上げる地域は那覇市壺屋地区と読谷村座喜味地区である。いずれも「やちむんの里」として知られているが、それぞれがどのような変遷を経て今日に到っているかを、「やちむん」を文化資源として捉え直すことで明らかにする。なぜなら、その歴史の変遷を追うことで、地域の再生あるいは創生に向けた取り組みに有効なヒントが得られるのではないかと考えるからである。

文化資源はここ20年で地方自治体の文化政策あるいは地域政策学や文化政策学などの学問領域で本格的に用いられている概念である。2002年に設立された文化資源学会の「設立趣意書」によれば、文化資源とは「ある時代の社会と文化を知るための手がかりとなる貴重な資料の総体」（文化資料体）であり、「博物館や資料庫に収めきれない建物や都市の景観、あるいは伝統的な芸能や祭礼など、有形無形のもの」が含まれる^①。

文化資源は文化財とイコールではない。文化財保護法によれば、文化財は有形無形に関わらず、国や地方公共団体により指定され、保護の対象となる歴史的、芸術的、民俗的、建築的、学術的に価値が高いと認定されるものである。しかし、文化資源は「ある時代の社会と文化を知るための手がかり」となるものであればよく、それ自体が持つ価値の高低とは必ずしも関係はない。その意味で、文化資源は、文化財を含みつつ、それよりも広範囲かつ柔軟に応用可能な概念であるといえるであろう。

前述の「設立趣意書」によれば、文化資源学会の目的として「さまざまな形で流通し、埋蔵され、あるいは消失の危機に瀕している資料を発掘し、考証と評価、整理と保存、公開と活用といった諸段階を総合して、文化資源の形成・発達をリードする研究を推進すること」を掲げている。ここに記された「発掘」から「公開と利用」へと至る諸段階はそのまま「資源化」の過程と見ることができるであろう^②。

本稿で取り上げる「やちむん」は沖縄の「ある時代の社会と文化」を知るための手がかりと

なるものであり、その意味で文化資源である。しかし、歴史的には「やちむん」の文化資源としての価値は時代の移り変わりとともに変化していく。したがって、「やちむん」の歴史を追うことは沖繩社会の移り変わりを明らかにすることになる。文化資源という視点は、社会の変化に対してどのような対応が可能であったかを明らかにすることにもなるのである。

ここで、本稿で言う「やちむん」について確認しておきたい。「やちむん」とは沖繩の言葉で焼物を意味するものであり、現在では主に「陶器」と同義で使用されている。「やちむん」には基本的に無釉陶器としての荒焼と施釉陶器としての上焼がある。しかし、本稿では生み出された作品のみを「やちむん」と捉えるのではなく、「やちむん」に関連するものを構成資源として扱い、それらを含めた総体を文化資源としての「やちむん」として捉えることにする^③。具体的には、「やちむん」には制作のための陶土や釉薬といった原材料が必要であり、作り手としての陶工がいる。「やちむん」焼成の形態である窯には伝統的な登り窯をはじめ、ガス窯や灯油窯、電気窯などがある。窯がある場所も重要な構成資源の一つである。本稿で取り上げる那覇市壺屋と読谷村座喜味は沖繩の「やちむん」生産において歴史的にも代表的な窯場であり、那覇市壺屋と読谷村座喜味という場所自体が「やちむん」の構成資源になるのである。

以下、本稿では文化資源の資源化について整理した後、那覇市壺屋と読谷村座喜味で展開した「やちむん」をめぐる歴史の変遷について考察していく。

1. 文化資源の資源化

(1) 資源化と主体

前述のとおり、文化資源の資源化過程は「発掘」「考証と評価」「整理と保存」「公開と利用」の4段階として捉えることができる。資源化にとって重要な点は文化資源の「活用目的」であり「活用可能性」である。資源化の4段階はこの視点からとらえることが重要である。

本章ではとくに発掘について検討する。先の「趣意書」では「さまざまな形で流通し、埋蔵され、あるいは消失の危機に瀕している資料」を「発掘」するとなっているが、それは必ずしも未知であることを条件とはしない。既知であってもそれまで価値が認められていなかった資料に何らかの価値を見出すこともあるからである。その場合は、資料としての価値の発見あるいは再発見といえるであろう。

発掘あるいは発見/再発見において重要なのは主体である^④。それは個人であり、何らかの民間組織や団体、あるいは行政である。それぞれの主体は必ずしも単独で行動するわけではない。それぞれが協働して資源の発掘に努める場合もある。その場合には、主体間で資源の活用目的を共有することが必要となるであろう。

文化の振興による地域の再生あるいは創生を目的とする地域政策を例にとってみよう。

地域政策にとっては地域住民と行政との協働が重要である。[小林 2020:272] の指摘にあるとおり、地域文化振興の鍵となるのは「住民の力」である。しかし、その「住民」は地域に居住する全員ではなく、「地域の住民であるという意識が高い人」である。[小林 2020:272] は「地域の住民であるという意識が高い人は地域の事象に関心が高く、細かい事情まで知識を持っている。そうした人たちと協働しながら、その地域の資源となる文化は何か、そしてそれを活用していくために住民の力を最大限発揮できるようにする環境とは何か、そこでの最適な行政の役割（行政の変容も含む）とは何か、といったことを問い続けなければならない」と述べている。この点は、「発掘」だけではなく、「公開と利用」へと至る資源化のそれぞれの段階において重要である。

(2) 「よそ者」の役割

その反面、資源の発掘は地域住民だけでは必ずしも十分ではない。[佐藤 2008:15] の指摘にあるとおり、何に資源を見るかはその人の「見る眼」に依存するからである。[小林 2020:270-271] が指摘するように、ある資料が地域住民にとってはあまりに当たり前すぎて意識されず、「文化」とも見なされないのであれば、それは資源にはなり得ない。そこで注目されるのが「よそ者」の存在である。[敷田 2009:86-89] は「よそ者効果」として①技術や知識の地域への移入、②地域の持つ創造性の惹起や励起、③地域の持つ知識の表出支援、④地域（や組織）の変容の促進、⑤しがらみのない立場からの問題解決の5点に整理している。「よそ者」は「よそ者」として地域住民とは異なる視点を持ち、地域に対して新鮮なまなざしを向けることができる。地域住民が気づかない、見落としがちな地域の価値あるいは魅力を、「よそ者」が「よそ者」であるがゆえに見発見/再発見し、文化資源とすることができる。それを受けて地域住民は「よそ者」の言葉に耳を傾けることが重要である。そうして地域住民は地域の文化資源の存在と価値に気づくのである。そして、発見/再発見された文化資源を「よそ者」が地域住民や行政と共有することで資源化が進行することになる。

(3) 資源価値の変化

しかし、文化資源が「ある時代の社会と文化」と結びついているならば、その価値は社会の変容に応じて変化していくことになる。それは文化資源の価値を高めることもあろうが、場合によっては、資源としての価値が希薄化したり、剥奪されたりすることにもなるであろう。物的資源であれば、劣化や破損、あるいは火災や戦争といった人為災害、地震や豪雨等による自然災害によってその価値を減じたり消失したりすることが想定されるが、社会の変化が人びとの意識の変化を生み、同じ「何か」であってももはやそれまでと同じ文化資源としての価値をそこに見い出さなくなることも想定される。その場合には、その文化資源を消失させる方向で

動くか、あるいはそこに新たな活用可能性を見い出して保存する方向で動くかが基本的な選択肢となる。

本稿では、後者の方向を模索する場合を文化資源の「再資源化」と呼ぶことにする。なお、価値を認められなくなった文化資源が、既存の場所から移転することによって移転先で新たな文化資源として根付いていくことも想定される。本稿で取り上げる読谷村座喜味地区の事例がそれである。その場合は文化資源の「新資源化」と呼ぶことにしたい。

次章以下では、資源化・再資源化・新資源化を鍵として、文化資源としての「やちむん」の変遷を追っていく。

2. やちむんの資源化

第1節 壺屋の形成

沖縄におけるやちむんの本格的な生産開始は琉球王国時代の17世紀にまで遡ることができる^⑤。『琉球国由来記』[伊波・東恩納・横山編 1962:133] 巻4の「陶工」には、中国明朝の年号で万暦44年(1616年)に、当時の佐敷王子、すなわち後の尚豊(第二尚氏王統第8代国王)が薩摩から琉球に帰国する際に、高麗人の一官、一六、三官という3名の陶工を伴っていたことが記されている。この3名による技術指導によって沖縄でやちむん生産が始まり、そのやちむんは「高麗焼」と呼ばれたという。そして、『球陽』[球陽研究会 1974:218] 巻7には、それまでの美里郡知花、首里宝口、那覇湧田にあった3つの陶窯が牧志邑の南、すなわち今日の壺屋に移されたことが記されている。これ以降、壺屋がやちむん生産の中心になっていった。

[倉成 2014:19-20]によれば、沖縄の陶器生産は17世紀に本格化した。その一方で、中国や日本からの陶磁器(貿易陶磁器)の大量輸入があった。琉球王国時代の当時、王家や士族層は貿易陶磁器、とりわけ白磁を珍重し、沖縄産陶器はあくまでも実用品として使用されたという。しかし、「やがて沖縄独自の美意識や生活様式、儀礼が整えられると、輸入陶磁器ではできない、まさに沖縄に住む人々の生活と美意識に根差した焼物が作られる」ようになった。後に柳宗悦、河井寛次郎、濱田庄司といった民藝運動の担い手たちが壺屋のやちむんを高く評価し、日本全国へとその美を紹介していくことになるのであるが、それは彼らが壺屋のやちむんに「沖縄独自の生活と美意識」を見たからであった。

第2節 民藝による壺屋の発見

(1) 発見の主体としての民藝

壺屋のやちむんが沖縄の誇るべき「文化」であることを発見したのは、柳宗悦や河井寛次

郎、濱田庄司といった民藝運動の指導者たちであった。彼らの来沖がその直接の契機となった^⑥。

河井と濱田は、ともに東京高等工業学校（現在の東京工業大学）窯業科を卒業し、卒業後は京都市立陶磁器試験場に就職した。彼らが初めて沖縄を訪れたのは1918年8月のことであった。当時、那覇区長であった当間重慎を介して壺屋の陶工新垣栄徳を紹介され、その後、来沖時にはこの新垣栄徳窯で作陶に励むことになる。

一方、柳が初めて沖縄を訪れたのは1938年12月末のことであった。柳は学習院中等科在学中に琉球王家に連なる尚昌と出会い、高等学科時代に紅型とやちむんに魅了される。1923年には尚昌を通じて沖縄旅行を計画するが、尚昌が逝去したことでやむなく断念している。

柳や河井、濱田ら民藝運動の一行は、柳が沖縄県学務部長であった山口泉から招聘を受けたことで来沖した。柳は、この翌年10月、「琉球の富」を發表し、墳墓・首里・本葺瓦・琉語・和歌・音楽・舞踊・琉装・織物・陶器を取り上げて、その魅力を語っている〔柳 2022:7-54〕^⑦。柳が沖縄の中に「文化」を見い出したのは紅型とやちむんだけではなかったことがわかる。

では、なぜ民藝運動の担い手たちは発見の主体になり得たのであろうか。

第1に、彼らは「民藝」という確固たる美の評価基準を持っていたことである。「民藝」とは「民衆的工藝」の略称であり、柳を理論的支柱として、河井や濱田、さらにはバーナード・リーチらによって進められた、美意識の転換を伴う文化運動である。柳の「民藝の趣旨」〔柳 2005:159-161〕によれば、「民藝」とは「貴族的工藝美術」に対する用語である。「貴族的工藝美術」が民衆の生活からかけ離れたものであるのに対し、「民藝」は民衆の生活と結びついた、あるいは民衆の生活を色濃く反映した工藝であった。さらに、柳は商業主義や単なる趣味に墮した粗悪品や用の目的を軽視したものは軟弱で病的であるとして民藝とはみなさなかった。「用途を誠実に考えた健全なもの」「生活に忠実な健康な工藝品」をこそ「民藝品」と呼ぶべきことを提唱したのである。柳はそこに表れた美を「健康の美」「無事の美」と呼んだのであった。

柳は壺屋のやちむんに「健康の美」「無事の美」を見た。柳からすれば、壺屋は「日常の雑器や祭器の数々」「生活の用具で焼物に適したものは殆どなんでも拵えられる」場所であり、それらに表れる沖縄独特の形や模様により「地方の民窯として十分に独自の存在を有つ」ものであったのである〔柳 2022:111〕。

第2に、彼らが「よそ者」であったからである。柳は自身が沖縄を訪れるまで沖縄について「貧しく、暗い沖縄」という認識しか持っていなかった。しかし、沖縄で柳が見たのは「優れて、明るい沖縄」であり、誇るべき文化を持つ沖縄であった。その一方で、沖縄の人びとは自らの文化についてその価値に気づかず、文化ともみなしていなかった。むしろ、日本との関

係においてそれを卑下する負の意識を持っていた^⑧。柳は、「壺屋の仕事は、現存する日本の民窯の中で、最も優れたものの一つに数えることが出来る」としつつ、「土地の人々や指導の位置にある人々は、却ってこの実情を認知していない。今出来るものにはろくなものはないように考え、それに雑器の類であるからとかく軽く眺めて了う。指導する者は、一日も早く旧態から脱却させて、本土風な新しい工業に発展せしめようとする」と記し、これに対して、柳は「沖縄の人たちはもっと自信を持って、故郷の品を誇りとして用ゆべきであります」と述べている [柳 2022:113-114]。

この点は、濱田も同じであった。[松井 2016:11] は、濱田が沖縄の文化に対して当時としては稀有な尊敬の念を持った知識人として壺屋の人びとに接したことは重要であると指摘している^⑨。そして、続けて、松井は陶工の新垣勲が「自分たちは壺屋で焼物をつくっていて、それほどつまらないものをつくっているとは思ってはいなかったのですが、濱田先生がすばらしいとほめて下さるものだから、それはずい分と自信になったものです」と語ったと記している。松井は「壺屋の仕事と品物を言葉をつくしてほめてくれたことは、普通一地方窯にすぎないとみられ、壺屋の人たち自身もそのように感じていたところに、大きな自信と喜びをもたらしてくれたのは確かなことであろう」と述べている。

(2) 「やちむん」という文化資源

柳ら民藝運動の担い手たちが見い出した「やちむん」とはどのようなものであったのであろうか。

第1に、作品としての「やちむん」である。それは、無釉陶器である荒焼と施釉陶器である上焼による、甕や壺、鉢、碗、瓶といった生活雑器であった。沖縄の伝統的家屋の屋根に魔除けとして鎮座する「シーサー」はよく知られている。また、骨壺である厨子甕も沖縄独特のものである。柳は厨子甕を沖縄に残る洗骨の風習が生んだ大切な必需品として重視している。それらはいずれも沖縄に生きる人びとの生活に根差したものであった。

第2に、登り窯である。河井にとって登り窯は単にやちむんを焼成するための窯ではなかった。それは「幾代かに亘っての南蛮焼の光栄ある歴史を担ふに相応しいもの」[河井 1995:73-74] であり、壺屋におけるやちむんの象徴であった。登り窯と窯から上がる煙は壺屋でやちむんを生業として生きる人びとの生活の風景であり、壺屋という「やちむんの里」の風景を構成する大切な資源であった。

第3に、陶工である。言うまでもなくやちむんは作り手としての陶工がいなくては生み出され得ない。壺屋の陶工としては、民藝運動の担い手との関係で言えば、金城次郎が最もよく知られている^⑩。金城は新垣栄徳窯で働いていた陶工であり、同窯で河井、濱田と知り合った。金城は濱田の仕事ぶりを見て「やちむんは立派な仕事である」と考えるようになったと後に回

顧している。河井は、金城について、「気立てのよい素晴らしい仕事師である。轆轤ならばどんなものでもやってのける。彫ったり描いたりする模様もうまく、陶器の仕事で出来ないものはない」[河井 1995:81]と称賛している。金城は、1985年、「琉球陶器」で国指定重要無形文化財保持者（人間国宝）となる。

第4に、壺屋の生活である。柳と河井、濱田はともに「壺屋での暮らしぶりの良さ」について言及している。柳は壺屋の仕事が害されていないのは壺屋での暮らし方が自然で人為的に歪められたところが少ないからであると述べている [柳 2022:114]。また、濱田は壺屋には「壺屋全体の暮しと仕事に純粹さの濃さ」があり、それに救われて壺屋での暮らしを素直に出来たことが思いがけない仕合わせであったと述べている [濱田 1974:33-34]。そして、河井は、陶工とその家族を含めた壺屋での仕事と暮らしについて描写した後、「壺屋の陶器はこんな中から出来て来るのである。材料と技術の外に環境と暮らしがどう物を決定するかと言ふ事の、是等はそのわずかな例に過ぎない」（傍点引用者）と記している [河井 1995:93]。この河井の言葉にあるように、資源としての「やちむん」は単に原材料や窯、陶工といった要素だけでなく生産の場における生活と密接に結びついていることがわかる。すなわち、生産の場それ自体もまた重要な文化資源であるのである。

(3) 民藝が果たした役割

民藝運動の担い手たちは壺屋におけるやちむんの資源化の役割を果たした。壺屋にとって「よそ者」であった彼らは、壺屋のやちむんの中に地元の陶工たちが気づいていない「健康の美」「無事の美」を見い出した。彼らはそれを民藝という美の基準からみて「誇るべき文化」であると評価して壺屋の陶工たちに示すだけでなく、『琉球の陶器』[柳宗悦編著 1995]や『琉球の富』[柳 2022]などの著作によって県内外にも広く紹介した。そこには作品としてのやちむんの魅力は言うまでもなく、壺屋に生きる人びとの暮らしぶりが生き生きとした文章で描かれるとともに、壺屋という「やちむんの里」の風景が温かいまなざしを通して丁寧に描かれている。柳はそれらの著作を通じて、明るく優れた沖縄を語って、暗く貧しい沖縄に対する誤解を解き、沖縄の人びとの自身を卑下する意識を払拭させようとしたのである。

また、濱田は自身がその人柄と作品を愛した金城次郎を世に送り出す役割を担った。[志賀 2021:394-395]によれば、戦後、米軍統治下にあった沖縄に本土の瀬戸や有田から安価な食器が移入され、壺屋の上焼の売り上げが落ち込んだ時、濱田が目利きの多い東京で壺屋の陶器、とりわけ金城の作品を紹介したいと考え、濱田の選んだ金城次郎、小橋川永昌、新垣栄三郎の3人による「沖縄壺屋三人展」を、1972年5月、三越本店で開催したという。志賀は「この会はある意味で次郎の披露会みたいなもので、金城次郎の名は次第に広まりました」と記している。

以上、民藝運動の担い手たちを通して、壺屋の「やちむん」の資源化についてみてきた。

しかし、沖縄戦と戦後復興を経て、高度経済成長期の1960年代を迎え、壺屋を取り巻く生活環境は大きく変化していくことになる。それは壺屋の人びとの暮らしぶりをも大きく変えていくことになったのである。

3. やちむんの再資源化

第1節 壺屋の変容と煙害問題

(1) 壺屋の変容

沖縄戦後、戦災からの復興が始まったのは、被害が比較的少なかった壺屋からであった^①。米軍統治下に入った沖縄で、壺屋の陶工たちには一足早い壺屋への帰還が認められ、食器を中心に生活雑器の生産が再開された。その後、経済活動が再開されるようになると、1ドル360円という条件も加わって、大量生産された安価な日本製陶磁器が流入し、生活雑器としての壺屋焼のシェアが奪われていった。壺屋を取り巻く環境が変化していく中で、壺屋自体が変わっていくことを余儀なくされたのである。

戦後、壺屋を取り巻く環境が決定的に変わったのは1950年代末から60年代後半にかけてである。その要因には大きく2点がある。第1に、壺屋の都市化が進んで那覇市の中心部として発展し、それに応じて壺屋地区に人口が流入して過密状態となり、住宅密集地となったことである。1938年には1308人であった人口が、1967年3月には9倍の11828人にまで膨れ上がっていた。そのほとんどが「やちむん」を生業としない人びとであり、「やちむん」を資源とはみなさない人びとであった。第2に、日本が高度経済成長期に入った1950年代から60年代にかけて、全国で公害が発生し、深刻な社会問題になったことである。先述の河井の記述にもあったとおり、壺屋におけるやちむん生産の象徴ともいえるものが登り窯であった。河井にとって、登り窯が盛んに煙を上げている風景が壺屋の風景であった。しかし、壺屋に新たに移住してきた人びとの眼にはそのように映らず、単に煙害をまき散らすものとし映らなかったのである。

このような変容が壺屋から登り窯の火を消すことになり、陶工たちのやちむん生産のあり方自体を変えていくことになるのである。当時、やちむん焼成の形態としては登り窯に加えてガス窯が導入されようとしていた。そして、登り窯の廃止とガス窯の普及は壺屋における陶工たちの関係を変えていくことになるのである。

(2) 資源の価値喪失

壺屋で登り窯から出る煙が公害であるとして問題となってきたのは1960年代末のことであ

る。沖縄タイムス（1967年8月6日付け）には「窯の煙にもの言い」と題する記事があり、登り窯の移転を含めて、住民からの苦情への対応に苦悩する壺屋の姿が記されている¹⁹。[那覇市立壺屋焼物博物館 2015:17]によれば、壺屋で煙害問題が騒がれる一方、沖縄の陶芸界はまれにみる好景氣を迎えていた。その背景には「泡盛ブーム」「骨董・民芸ブーム」「日本復帰と海洋博ブーム」などがあり、「作れば売れる」という時代を経験していたのであった。煤煙問題で登り窯の生産量を減らさなければならないという状況に対応するためにガス窯の導入が増えていった。それは時代の要望に合わせて行われたものであったが、「工房内の限られたスペースの中でも窯を構えることができ、かつ周りの住民に与える影響が少ないガス窯を導入するということは現実的な選択肢」であった[那覇市立壺屋焼物博物館 2015:17]。しかし、陶工たちの共同使用であった登り窯が個人使用のガス窯に切り替わっていったことは壺屋の陶工たちの関係を微妙に変えていくことになる。

[那覇市立壺屋焼物博物館 2015:11]によると、1970年頃に付近住民により壺屋公害対策連絡会議が結成され、生活環境を守りたい住民と従来通りの生産体制を維持したい陶工との摩擦が表面化していった。1971年には、当時の琉球政府が「公害対策基本法」を制定し、復帰の年となった72年には沖縄県が「沖縄県公害防止条例」を、那覇市が「那覇市公害防止条例」を制定した。壺屋の陶工も行政の指導や付近住民の苦情に応じて窯焚きの回数を減らし、登り窯の改良にも臨んだが、それらの試みも住宅密集地となった状況では根本的な解決にはならなかったという。

そして、1974年5月、那覇市は登り窯を使用して窯焚きを行っている陶工に対して煤煙防止対策ができるまでは登り窯の使用を停止すべしとの勧告を行った。こうして、最後まで使用されていた東ヌ窯の火が消え、壺屋における陶器生産の現場から登り窯による窯焚きが途絶えてしまったのである。それは登り窯という「やちむん」の構成資源がその価値を喪失した瞬間であった。

そして、先述のとおり、「やちむん」の構成資源として重要であったのは壺屋での「生活」「暮らしぶり」であった。しかし、それ自体が変容を余儀なくされていった。柳は1961年にこの世を去るが、「作れば売れる」という壺屋のやちむんの状況を柳はどう見るであろうか。柳によれば商業主義や単なる趣味に墮したものは民藝ではなく、「健康の美」でも「無事の美」でもなかった。柳が生きて当時の壺屋の状況を見たとすれば、登り窯の使用停止以上に、壺屋における生活の変化に危機感を覚えたのではないだろうか²⁰。

第2節 残存資源の保存と活用

(1) 再活性化に向けて

登り窯は文化資源であるやちむんの構成資源であった。やちむんの作品自体はガス窯で焼成

されることで壺屋におけるその伝統が途絶えることはなかったが、登り窯から火が消えることはやちむんの構成資源の一つが資源としての価値を喪失することであった。先述の河井の記述にもあったように、登り窯は「光栄あるやちむんの歴史を担う」象徴となる建造物であり、窯焚きに使用されて煙を上げ、作品を生み出すことではじめて生きる資源であった。また、登り窯は共同窯でもあった。登り窯が消え、各陶工によるガス窯へと切り替わったことは壺屋における陶器生産の共同性を希薄化し、工房ごとの個別活動へと分散させる結果となっていった。

壺屋の変容は壺屋内外で危機感を持って捉えられた。1969年に結成された「ヤチムン研究会」の初代会長に就任した曾根信一もその一人であった。曾根は同会会誌「やちむん」の第2号と第3号に「壺屋町見聞覚書」(正・続)を執筆している。第2号は1971年8月、第3号は72年8月の発行である。第2号から第3号へと続くこのわずか1年のうちに壺屋をめぐる状況は一変した。曾根は壺屋の公害問題が深刻化し、今や壺屋が瓦解寸前にあるという危機意識のもとに「あれこれ選択している心のゆとりもないままに、不確かなことも、一見つまらなそうにみえることも、『続』としてかきとめておこうと思う」と続編の冒頭に記している[曾根 1972:30]。曾根は壺屋の瓦解によって壺屋の貴重な伝統や記憶が失われていくことが現実味を帯びてきたとき、壺屋の記憶を書き留めておくことが自身の役割であると自覚したのであろう。

このような状況を受けて、曾根は壺屋が取りうる2つの選択肢を示している[曾根 1972:34]。1つは、壺屋からの移転である。曾根は「これからの壺屋は、これまでの壺屋ではあり得ないのだから、壺屋焼の伝統を継続させるためには、昔の壺屋でなくなった壺屋をすてて、他に壺屋を作ること」であると述べている。今一つは、ガス窯の導入である。ガス窯の導入についてはすでに触れた。曾根は自身の求める「本道」が前者であると述べ、ガス窯を導入する陶工に対しては「それはそれで、うんと努力していい品物を作ってほしいと思う」と述べている。

しかし、壺屋には「やちむんの里」としての壺屋らしさを維持するためにできることがまだ残されていた。それは価値を喪失した登り窯の再資源化と、新たな「やちむん」関連資源の活用による「まちづくり」であった。

(2) 価値喪失資源の再資源化

柳は、沖縄で文化財保護法が定められることに対して「沖縄の文化財保護に」と題する短い文章を『琉球新報』(1955年1月1日付け)に寄稿している。柳は沖縄が「為すべき仕事」として2点を示している[柳 2022:191]。第1に、残された文化財をすべての面にわたって大切に保護することである。そして、第2に、伝統として今も伝わる技術や表現を決して棄てずに今後もそれを活かし育てていくことである。

壺屋はこの柳が提示した2点を現実に活かしていったということが出来る。壺屋では、登

り窯をはじめ「やちむん」に関連する残存資源を棄てはしなかった。それらの一部は「文化財」としての認定を受け、保存・保護の対象となり、再資源化されていった。加えて、新たに「やちむん」関連資源の活用が図られた。それらは壺屋にしかないものであった。

具体的には、壺屋の登り窯の一つである「南又窯」は取り壊されることなく、1973年3月、「壺屋の荒焼のほり窯附石牆」として県指定有形文化財に指定された。「南又窯」は酒甕や水甕、厨子甕などの荒焼を焼成した登り窯であった。2001年には「新垣家住宅」（主家・作業場・離れ・宅地・東又窯）が国指定重要文化財に指定された。この中の「東又窯」は新垣家の敷地内にあって上焼を焼成していた登り窯であった。2009年3月、東又窯は崩落したが、文化財として保存の対象となっていたため、同年8月には東又窯を含む新垣家住宅の保存、修理が開始されたのである。

これらは、やちむん焼成の役目を終えてしまった以上、河井の言葉を借りれば「遺跡」となった文化資源であった。しかし、それ自体は壺屋におけるやちむん焼成の伝統を象徴するものであり、壺屋でやちむんを生業としてきた人びとの記憶が色濃く染み込んだものであった。価値がなくなったから棄てるというのではなく、窯本来の目的からは離れてはいるが、壺屋に生きる人びとの記憶の継承と「まちづくり」という新たな目的のために活用可能性が再発見され、再資源化されたのである。

その他にも壺屋には琉球王国時代から続くやちむんの歴史が色濃く残っていた。例えば、壺屋の土地や集落を守るタチクチ（村建て）の神を祀るビンジュルグワー御嶽、壺屋焼物博物館の敷地内にあり、土地の神である土帝君と焼物の神が習合して祀られている北又宮、沖縄の言葉で「スージグワー」と呼ばれる人幅ほどの路地道などである。北又宮は陶工やその家族など焼物関係者によって拝まれているだけでなく、一般の住民からも地域の発展と健康祈願で拝まれている。また、スージグワーは、壺屋における戦争被害が比較的少なかったため、戦前から残る景観を保っている。その他に、壺屋には赤瓦の屋根に象徴される那覇の伝統的景観も残っている。これらは、「やちむん」の構成資源として、壺屋の再生とその後のまちづくりのために再発見され、活用されているのである。現在、壺屋らしい風景は「やちむん通り」で見ることができる^④。

第3節 壺屋焼物博物館の建設

壺屋が再活性化を必要としたとき、那覇市が構想したのは「壺屋焼物博物館」の建設であった。

資源化の過程に照らして考えれば、焼物博物館の建設は「やちむん」の資源化の最終段階である「公開と利用」に位置づけられる。那覇市によれば、その目的は那覇市の再活性化にあった。「壺屋焼物博物館構想（平成3年度）」[1991:1]によれば、那覇市は焼物博物館建設を

「グランドバザール那覇の創造」に資する主要構成産業と位置づけていた。壺屋は「歴史的にも商都那覇を支える主要産業であった窯業の地」であった。壺屋の「やちむん」に文化資源としての活用可能性を再発見した那覇市は焼物博物館の建設が「都市の記憶」を刻みつけ、「歴史的商都としての風格」を維持し、地域の活性化を促進することを期待したのである。

この構想の策定にあたって「壺屋焼物博物館構想検討委員会」が設置され、委員長に崎間麗進（那覇市文化財保護審議会会長、当時）が就任し、委員の中には平良邦夫（やちむん会会員）、松島朝義（陶芸家）、島袋常隆（壺屋町民会会長、当時）などやちむん関係者や地元住民の代表が名前を連ねていた。

しかし、焼物博物館の開館に至るまでの過程を振り返るとき、博物館建設がかなり見切り発車であった印象は否めない。焼物博物館初代館長を務めた渡名喜明は、準備段階で専任担当者が2名で、「肝心の学芸員は1人もいない」「展示される予定の資料は、掘り出された窯跡2基しか確定していない」と書いている〔渡名喜 2000:5〕。開館日程も決まっている中で、準備段階としてはかなり厳しい状況にあったと言わざるを得ない。博物館建設に携わった仲尾次潤は、行政の施策として施設の建設を行うのであれば、行政が必要な人員配置などを準備段階から行い、十分に蓄積と検討を重ねて利用者の立場に立った施設づくりを進めることが必要であると指摘している〔仲尾次 2001:14〕。資源化の主体に行政が含まれるとき、行政が果たす役割を明確にしておくことが必要である。博物館建設のように予算措置を必要とする場合は、とくに行政の適切なリーダーシップが求められることになる。

行政のリーダーシップが必要なのは博物館開館に至るまでの過程に留まるものではない。博物館が開館しても、それを適切に運営していかねばならないことは言うまでもない。人員としてとりわけ重要なのは学芸員である。学芸員をどのように配置するかは行政による博物館運営の中核になる問題である。前出の「博物館構想」によれば、博物館には「収集・整理・保存」「調査・研究」「展示・教育・普及」が学芸員の役割としてある。2023年8月、筆者は壺屋で聞き取り調査を行ったが、そこで確認したのは、学芸員が上記の役割に加えて地域住民とコミュニケーションを取ることに努め、場合によっては行政とのパイプ役を務めることもあるということであった。博物館は地域に根差し、地域の活性化の一端を担う役割を持つものであるため、地域住民から乖離したものであってはならず、学芸員による地域住民とのコミュニケーションは重要な役割となる。

焼物博物館が文化資源であるならば、その運営に携わる学芸員もまた重要な文化資源である。那覇市が博物館に求めたものが「地域の活性化」であるならば、なおさらそのことをしっかりと認識して、行政は学芸員の適切な配置を行うだけでなく、中長期的ヴィジョンを示して博物館の運営を主導していくことが重要となるのである。

4. やちむんの新資源化

第1節 金城次郎窯の読谷村移転

「やちむん会」の曾根信一が、登り窯による煙害に端を発する壺屋の「やちむんの里」としての危機にあたり、壺屋が取りうる選択肢の一つとして「壺屋の移転」を示したことはすでに見た。それは登り窯を壺屋ではないどこかに新たに設置することを意味するものであった。すでに確認したように、登り窯は「やちむん」を象徴する重要な文化資源であった。曾根にとって、やちむんを焼成できるからという理由で単純にガス窯に切り替えればすむという問題ではなかったのである。

壺屋の陶工たちが自らの進むべき道を模索する中、登り窯による焼成にこだわったのは金城次郎であった。金城は、登り窯の廃止をめぐる壺屋の公害問題に対しては、「登り窯でなければ作る気がしない」と後に語っている [金城 1980:33]。曾根の回顧するところによれば、壺屋の命運がいよいよとなったときに、金城に「東又窯で焼けなくなったらどうするのか」と尋ねたという [曾根 2000:60]。すなわち、金城に壺屋を出て登り窯による作陶を続ける意思があるか否かということである。それに対して金城は「いざとなったら窯の焼ける土地に行くほかには方法はあるまい」と答えたという。そこで、曾根は、当時はまだ軍用地であったが、近々返還される自身の持ち山を提案して読谷への移住を促したという。金城の返事を受けて、曾根は当時の読谷村長であった古堅宗光と交渉し快諾を得ると、金城の娘婿であった宮城智と読谷村役場のスタッフが読谷村座喜味における登り窯建設に向けて迅速に動いたのである。

金城次郎窯の初窯開きは1972年10月1日であった。[曾根 2000:62-63]によれば、県の文化財審議会がこの機を逸せず、金城を県指定無形文化財技能保持者に指定した。同年11月21日のことであった。曾根にとって、焼成の形態としての登り窯と陶工としての金城次郎は「やちむん」の重要な構成資源であった。その2つがともに那覇市の壺屋を離れ、読谷村の座喜味に移転してきたことは壺屋に代わる「やちむんの里」読谷村の輝かしい第一歩となるものであった。

金城次郎窯の読谷村移転は「文化の移転」という点から興味深い。壺屋が登り窯の火を消してゆく中で、読谷はその火を継承していくことで座喜味の地に登り窯によるやちむん作りという文化を移転させた。登り窯はガス窯とは違って個人で設置できるものではない。資金の調達だけでなく、土地の確保という点からも行政の協力が不可欠である。金城の場合は、読谷村長が登り窯建設を快諾したこと、返還予定の軍用地が建設予定となったこと、当時の読谷の都市化が進んでいなかったことなどが好条件としてあった。金城はこの地で「読谷壺屋焼」を焼成し、金城の代名詞とも言える線刻魚文の作品群を生み出していく⁶⁵。金城は1985年には国指定重要無形文化財保持者となり、1989年8月には読谷村の「名誉村民」となっている。

金城次郎窯の読谷村移転はその一点だけに留まるものではなかった。読谷村ではこれを機に本格的に「やちむん」による村づくりを進めていくことになる。すなわち、本稿で言う「やちむん」の新資源化が進んでいくことになるのである。

第2節 読谷村の「ヤチムンの邑」構想

(1) 「ヤチムンの邑」構想

[壺屋焼物博物館 2015:29]によれば、金城次郎窯の読谷村移転から2年後の1974年、陶工の大嶺實清が当時の読谷村長であった山内徳信を訪ねて、これからの沖縄の工芸を振興するために文化村づくりについて互いに語り合った。これを機にお互いの中にあつた「文化村」という構想が形をなしていったという。そして、1976年には共同使用の登り窯の築窯用地として、78年に返還予定であった米軍不発弾処理場の南側一帯を充てることに、大嶺實清ら陶工と山内との間で合意が得られたという。

読谷村はこれを機に、1978年3月には「ヤチムンの邑基本構想」を策定している[読谷村役場 2000:10]。それによると、その目的は「本物のヤチムンとは何か、沖縄のヤチムンとはどうあるべきかを探求する陶工の邑をつくる」というものであつた。その方向性は、沖縄の伝統的文化遺産のヤチムンを継承し発展させること、地域の伝統文化を興して生活に定着させるとともに他産業を興す礎となり地域の活力とすること、共同の登り窯を原則とした窯場をつくることであつた。また、これを機に、読谷村に「喜名焼」のルーツがあることが再発見されている。それは「ヤチムンの邑」を目指す読谷村にとって新たな文化資源となる可能性を有するものであつた。

そして、窯の形式を共同の登り窯とした点は重要である。これは、金城次郎窯に続いて、壺屋ではすでに使用が停止されていた登り窯という文化資源が新たに活用の場を移したことを意味するとともに、読谷村としても登り窯をやちむんの象徴として新たな地域づくりのために資源化する方向性を示したということになるであろう。山内徳信は回顧録で「これから到来する地方の時代にふさわしい島おこし、村づくりの柱として、歴史ある焼き物を生かした『ヤチムンの里』をつくり上げることが必要だった」と記している[山内 2014:129]。壺屋はやちむんの残存資源を再資源化することで「やちむんの里」としての特性を活かし、地域の再生に繋げた。一方、読谷は新たにやちむんを資源として導入することで地域の創生に繋げていったのである。

(2) 「ヤチムンの邑」建設と発展

大嶺實清をはじめ、山田真萬・玉元輝政・金城明光の4名が登り窯の建設に着手したのは1978年のことであり、1980年には初窯出しが行われている。みやさとかずおは、個人窯でや

ちむん焼成をした経験を踏まえて「このようなことを続けていては、生活食器どころか、工芸ということをして口にする資格さえ失うのではないかという気持ちが強くなった」という大嶺實清の言葉を紹介している〔みやさと 1981:42-51〕。それは、1980年に那覇で開催された「沖縄のヤチムン振興シンポジウム」における講演での言葉であった。大嶺によれば、そのような状況をどのように再編し直すかを考えて出発したのが読谷の共同窯システムであった。続けて、大嶺は、「ヤチムンの里」の展望は「生活基盤の強化」「職人のリズムの取り直し」「作る視点の明確化」「生活文化との関わり具体化」「流通のあり方」にあると述べている。ここで大嶺が繰り返し言及しているのは「生活との関わり」である。生活との関わりを重視することは、陶芸作家や陶芸家を指向するのではない陶工意識が必要であるとの大嶺の姿勢であった。また、生活との関わりを重視することは地域との関係を大切にすることであった。大嶺は、読谷の地域には婦人会、老人会、青年会があり、とくに青年会の若者が陶芸に非常に興味を示しているとし、「もうちょっと落ちついたら、頒布会をしたり、作ったもので一緒にメシを喰ったりするとか、細かいことができそうな地域です」と述べている。このように、大嶺の言う「共同窯システム」は新たな読谷村の創生を視野に入れたものであったといえよう。

その後、1992年には彼らの弟子でもあった松田共司・松田米司・宮城正亨・與那原正守が「読谷山焼 北窯」を開窯した。その「読谷山焼北共同登り窯設立計画書」は「(読谷という)この土地が生み出すべき淘汰された工芸は、現代の生活の中でおも生かされるものと考えろ」「かつて、柳宗悦等がおこした民芸運動に見る庶民文化の見直しと沖縄アイデンティティの確立は決して一過性的ブームではなく、沖縄あるいは読谷の心として持続し続けるものでなくてはならないのである」という〔北窯刊行会 2022:166〕。彼らの理解する「民藝」がいかなるものであったかは置くとして、かつて柳や河井、濱田が壺屋に見出したやちむんの民藝としての価値を、彼らは読谷で継承し彼ら自身の生み出すやちむんに具現化しようとした。読谷への文化の移転は登り窯という窯の形式だけではなく、民藝というやちむん創作上の理念においても確認できるのである。

なお、松田共司は幼い頃の記憶から喜名焼に強い関心を抱き、「読谷村の焼物としてのルーツとしてのみならず、壺屋焼以前の沖縄陶器のルーツにも繋がっていく可能性を秘めた喜名焼を研究し、復興と発展に寄与することをライフワークにしたい」と語っている〔北窯刊行会 2022:36〕。読谷村座喜味における「ヤチムンの邑」構想は同地における喜名焼という文化資源の再発見にも繋がっていった。先の松田の言葉は、現在、その資源化が進められていることを示すものであろう。

おわりに

以上、文化資源としての「やちむん」の歴史の変遷について、資源化の視点から考察してきた。本稿で明らかにしたことは次の4点である。

第1に、「やちむん」を文化資源と捉え直すことにより、「やちむん」の中に資源としてのさまざまな活用可能性を見出す視点を得たことである。文化資源という概念は文化財よりも幅広く柔軟に対象を捉え得る概念であった。それゆえに、やちむんの場合、作品だけでなく、その制作過程に関わるすべてが構成資源として文化資源になり得るものであった。それは、本稿で取り上げた那覇市壺屋地区と読谷村座喜味地区の事例にあったように、地域の再生や創生に対して応用可能性を持つものであった。本稿ではやちむんを事例として取り上げたが、地域やまちの中には同じように資源としての価値を有するものがあるはずである。それを発掘あるいは発見／再発見し、資源という視点で捉えることによって地域づくりやまちづくりに積極的に活用していくことが重要である。

第2に、「発掘」から「公開と利用」へと至る資源化の過程においては、「よそ者」の役割が重要であることを、民藝運動の担い手たちに焦点を当てて考察した。「よそ者」は地域住民が認知していない「もの」に資源としての価値を見出し、活用に向けて行動することができる主体であった。但し、その一方で、壺屋地区の変容を事例に、新たに地域に移住した「よそ者」が既存の資源価値を剥奪する可能性があることも確認した。前者が民藝という確固たる美の基準を有していたこと、地域に積極的にコミットして地域住民との間で美意識を共有しようと努めたことを特徴としたのに対し、後者は地域の文化や伝統に守るべき価値を認めず、生活環境の維持を優先したことを特徴とした。当時、公害問題が社会問題化していたこともあり、既存の文化資源に資源としての価値を認識しなかったことはやむを得ないと思うが、地域に残る文化や伝統をどのように維持していくかという問題は、新たに地域に移住してきた人びととの間に地域の価値をどれだけ共有できるかにかかっていると見てよいであろう。文化資源が社会の変化を反映したものであるだけに、この課題は地域住民にとって重要であり続けるであろうし、地域の行政も積極的に協働して対応しなければならない課題であると言えるであろう。

第3に、那覇市における壺屋焼物博物館の建設、あるいは読谷村における「ヤチムンの邑」構想を事例に、資源化を完成させるために行政が果たすべき役割を考察した。行政は資源化の過程に重要な役割を担っているが、資源化が完成するためには行政がしっかりとした中長期的なビジョンを持ち、文化資源を資源として認識してビジョンの実現に向けて積極的に活用するという意識の有無が成否を分けることになることも確認しておきたい。

文化資源は地域づくり、まちづくりへの応用可能性を持っている。読谷村座喜味の事例は行政に携わる者の識見と決断、換言すればリーダーシップが地域の創生を実現した成功事例であ

る。何に資源としての可能性を見い出すか、見い出された資源をどのように活用するかを適切に判断していくことが重要である。那覇市壺屋の事例は地域を取り巻く環境の変化にどのように対応すべきかという困難な課題に取り組んだ事例であり、博物館建設と伝統的景観保存を実現したことは成功事例であると言えよう。しかし、行政の果たすべき役割については、本文中指摘したように、いわゆる「箱物」を作って良しとするのではなく、その運営にあたっては中長期的なビジョンを持って、その実現に向けた適材適所を旨とする人材配置を実施することが必要である。その意味で、行政で避けられない人事異動についても、ビジョンの実現とそれに向けた適切な運営を軸にして、異動のタイミングなども含めて適切に対応していくことが重要である。

なお、読谷村座喜味と那覇市壺屋の事例の双方において、地域住民との丁寧かつ綿密な合意形成が不可欠であることは言うまでもない。その点についても、行政の適切な対応が期待される。

第4に、文化資源学、あるいは地域政策学や文化政策学への理論的貢献である。文化資源という概念は比較的新しいものである。冒頭で記したとおり、地方自治体の文化政策や地域政策学、文化政策学といった学問領域で注目を集めている。とくに従来の文化財と異なる点はその活用可能性にある。本稿はその一端を扱うことにより、資源化に加えて再資源化、新資源化という概念を提示した。それは地域政策や文化政策の立案や学問的考察にあたって新たな視点をもたらすものであると言えるであろう。

今回の考察を踏まえて、今後はさらに事例研究を積み重ねて、理論的考察を深めていきたい。

(謝辞)

本稿をまとめるにあたって、那覇市立壺屋焼物博物館の主査学芸員である比嘉立広様、読谷村役場のゆたさむら推進部商工観光課主任主事の大城愛士様からは、インタビューを通じて貴重なお話を伺うことができたとともに、資料の提供にも御協力いただいた。ここに記して心より感謝申し上げます。

註

- ①「設立趣意書」については、文化資源学会 HP で公開されているものを参考にした。URL は次のとおりである。<http://www.1.u-tokyo.ac.jp/CR/acr/overview/shuisho.html> (2023年6月23日閲覧)。
- ②資源化については、あまり研究が進んでいない。差し当たって [竹口:2013] を参照。
- ③何をもって「文化資源」とするかについては、前出「設立趣意書」の定義を踏まえつつ、論者によって個別に定義される。例えば、伊藤裕夫は「文化」概念を2つに分類し、それに応じた広狭2種の「文化資源」の定義を試みている。伊藤によれば、祭りや伝統芸能それ自体を狭義の文化資源とし、それらを「習得・共有・継承」してきた何らかの「文化的環境システム」を広義の文化資源としている [伊藤 2008:55-57]。

- ④主体については、本稿のテーマからは外れるが、文化資源と密接に関係するシビックプライド研究において [松下 2021:73-85] が整理している。
- ⑤沖縄の窯業史については、[倉成 2014] [那覇市立壺屋焼物博物館 2011] [那覇市立壺屋焼物博物館 2011] を参照。
- ⑥柳をはじめとする民藝運動の担い手たちが沖縄を訪れた背景については、柳が「なぜ琉球に同人一同で出かけるか」と題する一文で記している [『復刻版 月刊民藝・民藝』第1巻 2008:2-5]。その中で、柳は沖縄に行く目的として沖縄の工藝を学び、紹介するとともに、作品の販売にも協力し、沖縄の人びとと沖縄の工藝が持つ価値やその独自性の維持について語り合いたいと記している。
- ⑦なお、[柳 2022] の「解題」によれば、「琉球の富」で列挙した項目について「民藝叢書第二篇『琉球の文化』(式場隆三郎編・昭和書房・昭和十六年九月二十日可刊)に容れるに際し、彫刻の項を書加えた」とある [柳 2022:350]。
- ⑧柳は、当時、沖縄に関する様ざまな文献があるにもかかわらず、一般にはよく知られていないこと理由として、沖縄に関する情報が「文化に対して理解の乏しい人達の粗笨な旅日記等に依る」ことに加え、「沖縄の人達の不必要な卑下から起る場合も少なくはない」と記している [柳 2022:9]。
- ⑨濱田の沖縄と壺屋に対する認識については、[濱田 1974] を参照。
- ⑩金城次郎研究については [松井健 2016] が詳しい。また、[金城 1980] では自身の半生について語っている。
- ⑪戦後の壺屋については、[那覇市立壺屋焼物博物館 2015] が詳しい。なお、[倉成 2014:61-132] は戦後を含めた近代における壺屋の変遷についてまとめている。
- ⑫壺屋における煙害問題に関する新聞記事については、[那覇市立壺屋焼物博物館 2015:14-16] に掲載されている。
- ⑬当時の沖縄の工藝が危機に直面しているという認識については、[財団法人沖縄協会 1974] にまとめられている。「民芸ブーム」「日本復帰と海洋博ブーム」により沖縄の伝統工芸に対する関心が高まり、沖縄の産業経済が混乱する中で「伝統工芸の将来の展望を考えると、まさに憂慮すべき時代に立たされていることを痛感せざるをえない」との認識が示されている [同:3]。
- ⑭「やちむん通り」の風景については、[倉成 2014:159-180] の「壺屋を歩こう」に写真とともに記されている。なお、戦前の壺屋の風景や出来事については [伊集 2021:1-16] で紹介されている。
- ⑮金城次郎の作品については、[那覇市立壺屋焼物博物館 2012] で観ることができる。この図録は金城次郎生誕百年を記念して那覇市立壺屋焼物博物館で企画・開催された展覧会『笑う魚』の図録である。

参考文献

- 赤嶺由紀子 [2003] 「壺屋焼物博物館の教育普及活動について」『壺屋焼物博物館紀要』第4号。
新垣栄盛 [1939a] 「壺屋陶工日記抄」『月刊民藝』第8号 (『復刻版 月刊民藝・民藝』第2巻 [2008] 不二出版所収)。
— [1939b] 「民藝協会の琉球行はどんな影響をのこしたか」『月刊民藝』第8号 (『復刻版 月刊民藝・民藝』第2巻 [2008] 不二出版所収)。
井口貢 [2007] 『まちづくり・観光と地域文化の創造』学文社。
井口貢編著 [2007] 『まちづくりと共感、協育としての観光 地域に学ぶ文化政策』水曜社。
— [2008] 『入門 文化政策—地域の文化を創るということ—』ミネルヴァ書房。
伊集守道 [2021] 「資料紹介 小橋川清福著『古き壺屋を語る』」『壺屋焼物博物館紀要』第22号。
伊藤香織+紫牟田伸子監修、シビックプライド研究会編 [2012] 『シビックプライド—都市のコミュニケーションをデザインする』宣伝会議。
— [2015] 『シビックプライド2『国内編』—都市と市民のかかわりをデザインする』宣伝会議。
伊藤裕夫 [2008] 「地域文化資源と文化マネジメント—富山の事例からの考察—」([井口編 2008:53-68] 所収)。
伊波普猷・東恩納寛博・横山重編 [1962] 『琉球史料叢書 第一』井上書房。
岩井千華 [2022] 「地域の矜持を蘇らせる地域文化資源再発見の集いに関する考察—北海道美唄市南

- 美唄町『南美緑会』を事例として〜』『公共コミュニケーション研究』第7巻第1号。
- 上原裕 [2000]「博物館づくりに参加して—壺屋焼物博物館の展示ができるまで—」『壺屋焼物博物館紀要』創刊号。
- 河井寛次郎 [1995]「壺屋と上焼」『琉球の陶器 復刻版』。
- 川井田祥子 [2013]「文化的景観を活かした地域再生の試み—兵庫県篠山市における取り組みから—」『文化政策研究』第7号。
- 菊地暁 [2019]「オープンであること / デジタルになること」『日本民俗学』300号。
- 北窯刊行会 [2022]『読谷山焼 北窯 四人の親方とやちむんづくり 一年の記録』グラフィック社。
- 球陽研究会編 [1974]『球陽 読み下し編』角川書店。
- 金城次郎 [1980]「私の戦後史 金城次郎 (陶工)」沖縄タイムス社編『私の戦後史 第2集』沖縄タイムス社。
- 倉成多郎 [2014]『壺屋焼入門』ポーターインク。
- 公益財団法人日本都市センター [2019]『住民がつくる「おしゃれなまち」—近郊都市におけるシビックプライドの醸成—』公益財団法人日本都市センター。
- 越真澄 [2001]「壺屋焼物博物館のできるまで—展示シナリオの作成を中心に博物館の完成と課題を振り返る」『壺屋焼物博物館紀要』第2号。
- 小林真理 [2013]「地域社会で文化資源が活用されるための環境整備」『文化資源学』第11号、文化資源学会編。
- [2020]「文化資源」小林真理編『文化政策の現在1 文化政策の思想』東京大学出版会。
- 小村弘 [2022]「歴史・文化資源を有する市街地における再構築について—ならまち、松江市及び金沢市の老舗による場の創出を中心として—」『日本観光学会誌』第63号。
- 財団法人沖縄協会 [1974]「沖縄の伝統工芸について—民芸ブームにおける危機—」『沖縄振興開発シリーズ』第6号。
- 佐藤仁編 [2008]『資源を見る眼—現場からの分配論』東信堂。
- 志賀直邦 [2021]『民藝の歴史』筑摩書房。
- 敷田麻実 [2009]「よそ者と地域づくりにおけるその役割にかんする研究」『観光学ジャーナル』9。
- 滋野浩毅 [2007]「都市の創造性に依拠したまちづくり主体の研究—楽洛まちぶらの会の成立・発展過程を事例に—」『文化政策研究』第1号。
- 城間悟 [2000]「壺屋焼物博物館建設物語」『壺屋焼物博物館紀要』創刊号。
- 曾根信一 [1971]「壺屋町見聞覚え書」『やちむん』第2号、ヤチムン会編集委員会編。
- [1972]「続・壺屋町見聞覚え書」『やちむん』第3号、ヤチムン会編集委員会編。
- [2000]「読谷村壺屋窯の始まり—金城次郎さんのこと—」『やちむん 30周年記念』第13号、やちむん会編集委員会編。
- 竹口弘晃 [2013]「地域の文化的資源の顕在化に関する研究—「文化の資源化」と「コンテクスト転換」による価値発現の視点から—」『文化政策研究』第7号。
- [2014]「地域の文化資源をめぐる社会的実践の理論構築に向けた予備的考察」『文化政策研究』第8号。
- 渡名喜明 [2000]「那覇市立壺屋焼物博物館の位置づけと開館の経緯 (上)」『壺屋焼物博物館紀要』創刊号。
- [2001]「那覇市立壺屋焼物博物館の位置づけと開館の経緯 (下)」『壺屋焼物博物館紀要』第2号。
- 富本真理子 [2009]「地域資源の活用による観光まちづくりに関する考察—地域資源活用モデルを使って—」『文化政策研究』第3号。
- [2014]「地域文化振興に『まち歩き』が果たす役割—『まいまい京都』を事例として—」『文化政策研究』第8号。
- 富本真理子・織田直文 [2007]「まちづくりに貢献しうる地域博物館に関する事例研究」『文化政策研究』第1号。
- 仲尾次潤 [2001]「壺屋焼物博物館の常設展示準備を振り返る」『壺屋焼物博物館紀要』第2号。
- 那覇市教育委員会 [1991]「壺屋焼物博物館構想 (平成3年度)」。

文化資源としての「やちむん」の歴史の変遷—沖縄県那覇市壺屋と読谷村座喜味の事例から—
(今林 直樹)

- 那覇市立壺屋焼物博物館 [2011]『琉球陶器の来た道』那覇市立壺屋焼物博物館。
— [2012]『笑う魚 金城次郎生誕 100 年』那覇市立壺屋焼物博物館。
— [2015]『現代沖縄陶芸の歩み』那覇市立壺屋焼物博物館。
— [2018]『民藝と壺屋焼—その影響と現在—』那覇市立壺屋焼物博物館。
芳賀久雄 [2013]「地域の文化資源を市民共有の財産として生かすための実践活動」『文化資源学』第 11 号、文化資源学会編。
濱田庄司 [1974]『無尽蔵』朝日新聞社。
濱田庄司 [1997]『濱田庄司「風にまかせて」』日本図書センター。
林直保子 [2021]「地域文化資源の鑑賞が地域の人々への愛着と信頼に及ぼす影響： 地域文化資源としての大坂画壇に焦点を当てて」『社会的信頼研究』第 2 巻。
藤原恵洋 [2013]「文化資源から導く『文脈』『矜持』『紐帯』の再生を軸とした地域づくり—熊本県菊池市における菊池文化資源総合調査を通して」『文化資源学』第 11 号、文化資源学会編。
『復刻版 月刊民藝・民藝』第 1 巻 [2008] 不二出版。
『復刻版 月刊民藝・民藝』第 2 巻 [2008] 不二出版。
『復刻版 月刊民藝・民藝』第 3 巻 [2008] 不二出版。
外間守善・波照間永吉編 [1997]『定本 琉球国由来記』角川書店。
干場辰夫 [2017]「文化政策における『文化』概念の問題」『文化政策研究』第 11 号。
真喜志好一 [2000]「壺屋焼物博物館の提案から完成まで」『壺屋焼物博物館紀要』創刊号。
牧瀬稔 [2019]「日本における『シビックプライド』の動向整理」『公共政策志林』7。
松井健 [2005]『柳宗悦と民藝の現在』吉川弘文館。
— [2020]「戦後沖縄における民藝と壺屋焼」『壺屋焼物博物館紀要』第 21 号。
— [2016]『金城次郎とヤチムン—民藝を生きた沖縄の陶工』榕樹書林。
松隈章 [2013]「愛着が生む地域力—『塩屋』と言う文化資源」『文化資源学』第 11 号、文化資源学会編。
松下啓一 [2021]『市民がつくる、わがまちの誇り—シビック・プライド政策の理論と実際』水曜社。
水尾比呂志 [1992]『近代日本の陶匠 濱田庄司』講談社。
宮崎修一 [2007]「博物館と市民との協働」『壺屋焼物博物館紀要』第 8 号。
みやさとかずお [1981]「明日に架ける橋 読谷村ヤチムンの里 共同窯にかける 4 人の陶工たち」『青い海』101 号。
ヤチムン研究会編 [1970]『やちむん』創刊号。
柳宗悦 [1939]「なぜ琉球に同人一同で出かけるか」『月刊民藝』創刊号（『復刻版 月刊民藝・民藝』第 1 巻 [2008] 不二出版所収）。
— [2005]『民藝四十年』岩波書店。
— [2022]『琉球の富』筑摩書房。
— [2022]『手仕事の日本』岩波書店。
柳宗悦編著 [1995]『琉球の陶器 復刻版』榕樹社。
山内徳信 [2014]『山内徳信回顧録 解放を求めて アリの群れライオンを襲う』沖縄タイムス社。
山下晋司編 [2007]『資源化する文化』弘文堂。
読谷村役場 [2000]『読谷村ヤチムンのむら振興基本計画—将来に継承されるヤチムンのむらをめざして』。
渡部薫 [2021]「地域づくりの方法としてのシビックプライド—その可能性と政策的関与のあり方についての検討—」『Kumamoto Law Review』vol.152。

参照 URL

文化資源学会ホームページ

<http://www.1.u-tokyo.ac.jp/CR/acr/overview/shuisho.html> (2023 年 6 月 23 日閲覧)

The Historical Change of Yachimun as a Cultural Resource —Two Cases of Tsuboya, Naha City and Zakimi, Yomitan Village in Okinawa—

IMABAYASHI Naoki

This paper is about the possibility of *yachimun*, Okinawan pottery as a cultural resource.

Yachimun is especially famous from Tsuboya, Naha City. In the past, the climbing kiln, a multi-chambered pottery kiln built on a hill has been the symbol of yachimun in Tsuboya. But in the 1950s and 1960s, climbing kilns caused terrible smoke damage in the Tsuboya area, so, newcomers of Tsuboya demanded its abolition.

Manufacturers had two choices. One was to make new climbing kilns in other regions. The other was to adopt different uses for climbing kilns. Many Tsuboya manufacturers adopted the second choice. However, they utilized the resources of yachimun for tourism including climbing kilns to maintain the traditional landscape of Tsuboya. Tsuboya continues to be a popular area as a yachimun village in Naha.

Other manufacturers took the first choice and made new climbing kilns in other regions, especially Zakimi, Yomitan Village, continuing yachimun production.

Tsuboya is a case of success in remaking its region. Zakimi is a case of success in establishing its region.

In both cases, the role of local administration and local residents was most important. Their ideas and motivations were the key to making and remaking of the regions using local cultural resources.